

いつも大変お世話になり、ありがとうございます。

今年は寒の戻りが厳しくて過ごしにくかった面もありましたが、そのお蔭で桜の花を長目に愛でることができました。皆さんもお花見する機会が多かったのではないのでしょうか。

時の経つのも早いもので、もう5月となりましたが、今月一日から先の天皇のご譲位とともに令和の時代に入りました。

「令和」という言葉は、「万葉集」を典拠としています。これまでも我が国の古典に基づく元号が検討されたことはありましたが、実際に採用されたのは今回がはじめてです。国民に親しまれてきた日本最古の歌集から考案されたことは、大変喜ばしいことです。

その原文は、「初春の令月（れいげつ）にして、気淑（よく）風和（やはら）ぎ、梅は鏡前（きやうぜん）の粉を披ひらき、蘭は珮後（はいご）の香を薫らす。」「時は初春の令（よい）月（※この場合『令』は“物事のつやがあるように美しいの意）であり、空気は美しく、風は和やかで、梅は鏡の前の美人が白粉（おしろい）で装うように花咲き、蘭は身を飾る衣にまとう香のように薫らせる。」

これは太宰府にあって、大伴旅人らがお花見の宴に集って、それぞれ歌を詠む情景を描いた文章です。歌の序文であり、このあとに梅の花を題材にした歌が32首つづきます。

お花見といえば、桜を思い浮かべますが、当時は中国から輸入された梅を楽しむのが最先端の流行でした。桜の花見が広まったのは、都が京都にうつり、菅原道真が遣唐使を廃止してからです。記録に出てくる最初の桜のお花見は、嵯峨天皇が神泉苑にて開催したものです。

このように奈良時代は、梅だけでなく、大陸からの政治、仏教、文化を取り入れながら、古代の日本人の心を活かした国家を建設した時代でした。万葉集は大和言葉を使った歌を集めたものでありながら、漢詩の作法にならって歌の前に序文をつけたのが「令和」のもととなる文章です。

令和の御代においても、我が国は自分たちの軸を見失わずに、世界の優れたものを取り入れつつ発展していくことを心がけなければならないと痛感しています。そういう意味でも、「令和」という言葉とその背景を知ることが誠意に意義深いものと考えます。